た。彼は皇帝權をば Universita christiana に對する奉仕と考へたのである。彼にとつての最終目的は基督教世界に以前の秩序を回復することであり、そのためにはトルコ人討伐、宗教分的裂の除去、一般的教會改革を必要とし、その實現にはフランス及び法王の協力を必要とした。Niece, Aiguemortes に於て皇帝は目的に到達したと信じた。

皇帝理念をばカール五世の政策の中心に持ち來したことは著者の功績であり、この皇帝理念が政治的見解と共に彼の一般的見解を支配してゐるといふ點同感である。それは ein Irreales, Doktrinäres, Ideologisches なるものであり、近世的な現實政策權力政策とは一致し得ざるものである。

著者の見解には二つの誤謬がある。一つは現實的政策とカール五世の政策のごとき理念的政策との絶對的矛盾性に對する頑固なる確信である、著者の見解に關らず(s. 183)彼の王家的名譽慾には權力意志や野心が強く働きかけていることは確かである。著者が皇帝をば盲目的イデオローグとして、空論政治家として、帝位のドン・キホーテとして取扱ふに於て (s. 112, s. 123, s. 341) 反對說が提出される。この「封建的國家理念の最後の代表者」(s. 22ff)も亦國內政策に於ては Souveränität, Staatsraison の原則を承知してゐたのである。皇帝が絶えずフランスとの和解に努力したことには現實政策的根據がある、フランスの反對は彼の世界計畫の貫徹の邪魔である故何等かの和解に達せんとしたのであり、この政策は成功したのであつた。

次に著者のテーマの時期制限の根據が充分でない。一五三八年以後の皇帝理念の衰退については說かれていない。かへつて以後の時代がその眞の實現期と考へられる。(トリエント會議、シユマルカルデン戰爭、アウグスブルグ假規定)

最後に „Realpolitik“ についてのアカデミックな概念を十六世紀の政治的宗教的事件にそのまゝ用ひることは誤解を招きやすい。この世紀の問題は勿論「現實政策的」には誤決出來ないけれども、現實性を缺いてゐるとは考へられない。カール五世に於ては世界主義的見解と權力政策的見解が緊密に結び合つており、後者を除き得る場合のごときは殆んどないのである。

(Hist. Zeitschrift Bd. 143. Fritz Walser 氏書評による。)

(Berlin, Ebering 1932. IX u. 452 S. 18 M.)　(鹽見)

●天皇と國史の進展

中村直勝著

「日本の歷史は必ず天皇を中心として進展して行く、……其時代の最も進んだ文明は、常に必ず宮廷に在る。言はゞ天皇が一番進んだ文化の所有者であると申してもよい。」これは中村助教授が平素講壇に於てまた座談に於て常に後進に說かゝところの持論である。それは氏の國史の研究に於ける最初のライトモテイーフであると共に、またその結果として常に新しくその意味を深めらるゝ所の信念である。この度公にせられた氏の新著は、一にかゝる主張を具體的に示さんが爲に御歷代の中より宇多、醍醐、後白河及び後鳥羽の四帝を擧げてその御事歷を考へその國史の進展の上に有せらるゝ大いなる意義を明かにせられ

んとされたものである。その何が故に特にこの四帝を擧げられたかはもとより外的なる機緣によるものあるとはいへ、いづれもわが國歷史の時代の最も重要なる轉換期に於て、一は攝關政治を斥け、他は武家政治を排して共に朝家の政權を確保せんとし給うた處、一脈相通ずるものあるを思ふならばその本書の主題に於て決して偶然ならざるを知り得るであらう。四帝は雪にその立たせらるゝ歷史的シィテュエィションに於て相似るのみならず、相互に時を隔てゝ一貫した脈絡の糸に繫がれ給ふ、而してその先は當然後醍醐天皇に結ばれねばならぬ。實に後鳥羽院の後その先蹤が如何に後代に繼承せれたかの問題はこの書に於て就中力を致されたところである。それが爲にまづ春日神社文書の內一通の假名消息を後鳥羽院の宸翰なるべしと斷じてその文意の奧にひそむ院の聖慮を窺ひ、また新に水無瀨宮所藏の文書を精査してその中に後村上天皇宸筆の御願文を見出で、それによつて從來多くたゞ憶測の範圍を出でなかつた南朝に於ける後鳥羽院御憧慕の事實を立證せらるゝなど實に著者にして始めて能くしうる所であらう。

かくてこの書は、その公刊の裏に現下の時勢に對する著者の大いなる關心の認めらるゝものがあるとはいへ、それ單に多くの類書に見るが如き立證の手續を經ざる敎說と異り、歷史家として要請せらるゝ最も嚴密にして眞摯なる考證の結果に基いてゐるのである。然もその考證を一貫して、皇覇の隆替纒綿も遂には皇道の勝利に歸するを以てわが國史の眞髓なりとする大いなる確信の存するところ、人をして自ら神皇正統記を思はしむるものがあり、歷史の中心を個人に求めその意欲の因果の上に時代推移の理を探れんとせらるゝ所、また多く親房の歷史觀に通ずるものがあるといひ得よう。實にこの書は、新しく詳述せられた神皇正統記である。（本文四一〇頁、口繪四葉、東京賢文館發行　定價三・五〇）（柴田）

◉南學史　寺石正路著

日本近世の學問史上に於て其古き傳統と獨特の學風と其顯著なる史的活動とによつて、山口の西學、薩摩の薩學、京都の京學と並稱される土佐の南學の歷史を得た事は我々にとつて非常な喜びである。鄕土史研究の旺盛となつた事は歷史研究の發展の一面であるが、此處に一地方を中心とした學派の歷史が鄕土史の大家として其地の史實に通曉せらるゝ寺石氏によつてなされた事は斯學發展の上に更に強き意義を持つものである。

本書に於ては日本上古の儒學及び宋學の概說に始り、それが中世五山の禪寺內で育てられた事情に及んで夢窓、義堂、絕海が說かれ、高知吸江庵の文化的位置が明にされる。かくて其學統の流に從つて近世に入つて谷時中、野中兼山、山崎闇齋等輩出の盛觀に至り、更に谷秦山を經て山口菅山、佐藤一齋の土佐人との關係に亘つて說かれてゐる。此の間地理的關係を詳しくし其人物傳記學統を微細な點まで考究され、他の地方との關係及び近世思潮全般との連絡結合等南學の學派的位置を鮮明にされてゐる。次で一條家の流を引く幡多文學等の地方文化に說き